

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 3 0 年 8 月 3 1 日現在

機関番号 : 3 4 4 2 9

研究種目 : 若手研究(B)

研究期間 : 2015 ~ 2017

課題番号 : 1 5 K 1 6 6 5 3

研究課題名 (和文) 「松林桂月桜雲洞関係資料」の調査研究

研究課題名 (英文) Research of Keigetsu Matsubayashi Oundou Collection

研究代表者

村田 隆志 (Murata, Takashi)

大阪国際大学・国際教養学部・准教授

研究者番号 : 8 0 6 2 5 5 9 1

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 2,200,000 円

研究成果の概要 (和文) : 本研究は、日本近代を代表する南画家、松林桂月 (1876 ~ 1963) が自邸「桜雲洞」に保管していた旧蔵の資料群「桜雲洞関係資料」について、整理・分析したものである。没後半世紀以上が経過しているが、その保存状況は良好であり、画家に関わる資料のほとんどが保たれていた。今回は、没後50年記念の巡回展を契機として、各館に分割して寄託されることとなったこの資料群について整理し、特に新出の詩稿に現れている桂月の胸中と、南画家としての矜持について考察を深めた。蓄積の乏しい、近代南画の研究にとって、基盤となる資料群の情報を、共有できるようになった成果が特筆される。

研究成果の概要 (英文) : This research organized and analyzed a group of documents "Oundou Collection" kept by Keigetsu Matsubayashi (1876-1963). More than 50 years have passed since he died, but the preservation situation was exceptional. This collection is very important when thinking about modern Japanese paintings in Japan. He was a representative "Modern Nanga" painter, so he had strong influence. By this research reveals his beliefs, activities and Impact on future generations. Many important things were revealed about "modern Nanga" where there were few studies.

研究分野 : 美術史

キーワード : 日本近代美術史 南画 日本画 漢詩

1. 研究開始当初の背景

近代日本美術史において、南画の研究は蓄積が著しく乏しいジャンルであると言える。フェノロサやマスコミによる指弾によって、明治初期の南画の流行が収束し、以降は見るべき活動を展開したのは富岡鉄斎のみである、というような、一面的な理解は、大正・昭和戦前以降、平成末年の現代に至るまで根強く残っていると言わざるを得ない。

このような状況にあって、本研究代表者は近代南画の研究を専門とし、これまで人生や活動が明らかではなかった近代南画家の研究を行ってきた。

特に、明治・大正・昭和の三代を生き、数々の作品を発表して近代の南画を牽引した画家、松林桂月(1876～1963)については、明治美術学会での発表を行うなど、年来の研究課題として取り組んできた経緯がある。華椿系の伝統を引き継いだ桂月は、その画塾に伝えられた粉本をはじめ、様々な資料を自身の制作の参考のために収集していた。また、漢籍詩文の教養に裏打ちされた詩稿などについても多数を蔵していた。これが「松林桂月桜雲洞関係資料」(以下「桜雲洞資料」)である。

彼の活動は、近世の画派の伝統を引き継いだ上で近代という時代と対峙し、自己の作風を構築し、次世代の描く現代の水墨画へと繋がっていった、極めて意義深いものであったと位置付けられる。しかし、本研究開始以前は、松林桂月についての研究は資料面の制約から限定的であったと言いうる。

研究代表者は2013年から翌年にかけて、山口県立美術館・田原市博物館・練馬区立美術館を巡回した「没後50年 松林桂月展」を監修し、その実務をも担当したが、当時は桜雲洞資料の全貌は判然とせず、出展作品に関連する資料を用いて論考を深めるに留まっていた。この展覧会により、主要な作品についての研究は飛躍的に深まったと言えるが、一方で、多くの関連資料が見いだされた。遺族の意向もあり、桜雲洞資料は展覧会の閉会に伴って各館でその性格に従って寄託を受け入れたため、調査研究の機運は高まりつつあった。本研究は、その状況を踏まえ、申請したものである。

なお、研究開始時点においては、桜雲洞資料は、以下のように各館にその性格ごとに分割して寄託されていた。

- ・松林桂月関連資料(下図、写生、日記、遺稿、収集品等)
- ・華椿系関連資料(渡辺華山・椿椿山・野口幽谷ほかの粉本、写生、作品等)
- ・維新志士関連資料(井上馨・伊藤博文、寺

内正毅ほかの遺墨類)

2. 研究の目的

前述のように近代日本美術史において、南画の研究は蓄積の極めて乏しい分野であるが、この時代を生きた南画家のうち、画壇に大きな影響を与えた存在としては安田老山、山岡米華、田近竹邨、小室翠雲、矢野橋村などが存在している。しかし、彼らの旧蔵資料はその多くが所在不明であり、松林桂月の旧蔵資料のみを研究の対象として使用できる現状にある。この状況を踏まえるとき、本研究の意義には大きなものがあつたと言いうる。

3. 研究の方法

本研究においては、研究期間中に大きな状況の変化があつた。当初はすでに各館に寄託された資料のみを整理して研究を深める計画であつたが、遺族宅に伝えられた資料が、なお相当数存在することが判明したのである。その中には、松林桂月の画業、およびその淵源となっている華椿系画派、そして近代日本画壇、南画壇を考える上で重要な、詩稿や原稿などの各種資料が含まれていた。

本資料群は遺族の旧宅整理に伴って、保存場所を早急に決定し、整理する必要に迫られた。この状況にあたり、大阪国際大学国際教養学部村田隆志研究室でこれらの資料を受け入れた。つまり、本研究申請時・開始時には思いもかけなかった資料群の登場により、桜雲洞旧蔵資料は田原市博物館・萩博物館・山口県立美術館寄託分に加え、大阪国際大学村田隆志研究室寄託分という4つを数えることとなった。

この予想外の事態に対応するため、寄託先各館からは、自館で整理した調査データの提供を受け、研究代表者は新規発見資料群の受け入れ、および調査と分析に注力した。

報告書掲載用の作品の写真撮影については、デジタル一眼レフカメラによる撮影を実施した。なお、膨大な量である「松林桂月桜雲洞関係資料」の全ての写真を目録に掲載することは困難であることが予期されたため、阪国際大学村田隆志研究室寄託分については、記録媒体によってデータを提供し、今後の調査研究、展示に活用してもらえるよう配慮することとし、特に統一されたルールのもとに

整理して箱に納められているような状況にはなかった資料群を、計測、撮影、調査を進めながら中性紙製保存箱に入れ替え、新たに番号を付与して今後の保管と活用に適するような状況になるように配慮した。

4. 研究成果

近代南画は、明治の前期以降、昭和の戦後

期に至るまで、長期的な退潮傾向にあった。そのため、美術マスコミが発達していた自題でありながら、日本画家や洋画家などに比して、近代南画家の情報が詳細に伝えられることは比較的少なかったと言える。

文化勲章を受章するなど、有力な作家であった松林桂月は、必ずしも情報が少ない作家とは言いがたいが、その動静は伝えられても、その胸中までも知ることは難しかった。しかし、今回の研究によって、南画衰微の時代に、その終焉を見つめた画家は何を考え、どのように行動していたのかを知り得たことは、本研究の成果であり、近代日本美術史に新たな視点を提供するものである。報告書の掲載論文「『桜雲洞旧蔵資料に見る近代南画人・松林桂月 漢詩との関わりを中心に』」のほか、美術史学会西支部例会での「(旧)日本南画院の活動とその意義 現代水墨画への影響をめぐって」として発表を行い、研究成果の発信に努めた。

また、『美術フォーラム 21』においても、桂月が企画し、主導した「日本南画名作展」を取り上げ「近代南画と「地方」の視座 「日本南画名作展」と『日本南画人小伝』をめぐって」と題する論考とした。

同時に、近代南画家の代表的存在である松林桂月の研究を深めたことは、研究代表者が並行して研究を続けてきた、その他の近代南画家 山本竹雲、木村耕巖、甲斐虎山などの研究においても、大いに益し、合わせて近代日本美術史の欠落を補うことができた。

近代の南画家にとって、自身の拠って立つ場である南画の衰退は、アイデンティティの喪失や、受け継いできた伝統の断絶に直結する重要な関心事であった。桂月も直面していたこの問題について、他の画家たちがどのように対応していたかを合わせて考えることにより、相互の研究の論が深まったことも特筆される。

さらに、本研究最大の発見は『桜雲洞詩鈔』の原稿を見出したことである。本書は、桂月が生前に刊行した唯一の自選漢詩集であり、漢詩と不即不離の関係にある南画家としての矜持を斯界に示した書物である。

1952年、桂月は自身の喜寿を記念して本書を編んだが、その後に詠んだ漢詩をさらに追加し、増補改訂版の『桜雲洞詩鈔』を米寿の記念として再度刊行しようとしていた。この増補改訂版の刊行は、桂月自身の急逝によって実現しなかったが、ほとんど完成にまで近づいていたことは添田達嶺『桂月山人』(陸月社、1965年)によって知られていた。

本研究による、大阪国際大学村田隆志研究室寄託分の桜雲洞資料に、この増補改訂版の原稿が含まれており、桂月最晩年の、ほぼ10年間に及ぶ詩作が知られたことは貴重な成果であった。自選の漢詩集であり、桂月が自身の米寿を記念して世に遺そうとしていた

という事実は、本書の内容が彼の最晩年の胸中の吐露であったことを意味している。本資料によってのみ窺い知ることができる、南画の衰微や、同世代南画家の逝去による感懷などは、松林桂月という画家を、近代の南画を考える上で、無二の重要な情報であると言える。

桜雲洞資料は、先年の回顧展開催、今回の研究費採択により、画家の没後半世紀を超えて散逸させることなく、未来に伝えることが可能となった。このことそのものも、本研究の重要な成果であり、後の研究者を裨益するものであるといえよう。

今後の展望としては、一部の重要な漢詩をもとに論じた報告書の掲載論文「『桜雲洞旧蔵資料に見る近代南画人・松林桂月 漢詩との関わりを中心に』」による発信に留まらず、増補改訂版『桜雲洞詩鈔』に掲載されるはずだった10年余の桂月の漢詩すべての解説と訳注を考えている。また、一部の資料が伝存していることが調査の結果判明した、小室翠雲関係資料群をも調査し、多角的に近代南画の研究を深めることとしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

村田隆志、安田老山の芸術境 岐阜に残る作品群をめぐって、査読無、書法漢学研究、第19・20号、アートライフ社、2017、30-36
村田隆志、近代南画と「地方」の視座 「日本南画名作展」と『日本南画人小伝』をめぐって、査読無、美術フォーラム 21、37号、醍醐書房、2018、20-25

〔学会発表〕(計3件)

村田隆志、(旧)日本南画院の活動とその意義 現代水墨画への影響をめぐって、美術史学会西支部例会、2017年
村田隆志、日本製羊毫筆濫觴考 安田老山の活動とその影響、書論研究会第38回大会、2017年
村田隆志、『美術真説』以降の南画家たち 木村耕巖と甲斐虎山の事例をめぐって、日本フェノロサ学会第38回年次大会、2017

〔図書〕(計3件)

村田隆志、上方文人文化の牽引者 山本竹雲の生涯とその芸術、平成27年度研究成果報告書・活動報告書、戸部眞紀財団、2017年1月) pp.39-44
村田隆志他、岐路に立つ現代水墨画、現代水墨画の旗手たち、頼山陽史跡資料館特別実行委員会、2016、pp.49-52

村田隆志他、福山市鞆の浦歴史民俗資料館、
南画家 木村耕巖 知られざる鞆の先覚者
、2016、pp.72-78

6．研究組織

(1)研究代表者

村田 隆志 Murata Takashi (大阪国際大
学・国際教養学部・准教授)

研究者番号：80625591